

『破戒』

とうじょうじんぶつ
登場人物

うしまつ
瀬川丑松 1

うしまつ
瀬川丑松 2

うしまつ
瀬川丑松 3

ぎんのすけ
銀之助

けいのしん
敬之進

しほ
お志保

お志保？

うしとうそん
牛藤村 1

うしとうそん
牛藤村 2

うしとうそん
牛藤村 3

うしがみ
牛神

「破戒」出番表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
丑松 1		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
丑松 2		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
丑松 3		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
牛藤村 1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
牛藤村 2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
牛藤村 3		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
銀之助		○	○			○		○			○	○		
敬之進		○			○		○							
お志保								○				○	○	
お志保？	○			○		○			○		○			○
牛神	○	○	○		○			○	○		○		○	○

牛神 うしがみ

総ては今この瞬間に起きている。

この瞬間こそが、過去や未来も変える可能性を秘めている。

お志保？ はじめまして。私は小説「破戒」に登場する。お志保と言う者です。

皆さん、ご存じかと思いますが「破戒」の作者は、島崎藤村です。

随分と前に書かれた小説ですので、古く感じる所もあるかと思えます。

古さも文学的な味わいとして、受け止めていただけたら幸いです。

島崎藤村は、小諸に住んでいたことがありました。小諸での生活が「破戒」の

世界観を作ったと思います。浅間山の雄大な自然と、そこに暮らす人々の営みに、

島崎藤村は、豊かな時間の流れを感じたのだと思います。

【1】

牛神 うしがみ

島崎藤村「破戒」。これより開演いたします。

牛藤村1 うしどうそん

これは過去の物語である。過去には後の時代にとって、反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。天長節の夜。宿直の当番であったので、

教員の瀬川丑松と土屋銀之助は小学校に残った。

牛藤村2 うしどうそん

風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

牛藤村1 うしどうそん

宿直室の時計は九時を打った。丑松は見廻りに行き、二十分ほどで帰って来た。

牛藤村3 うしどうそん

銀之助 ぎんのすけ

銀之助 ぎんのすけ
おい、どうした？

牛藤村3 うしどうそん

敬之進 けいのしん
敬之進。

敬之進 けいのしん

敬之進 けいのしん
顔色が悪いですよ。

牛藤村 3 うしとうそん
丑松 うしまつ

丑松 1 うしまつ
実は、不思議なことがあるんだ。

丑松 2 うしまつ
校舎を廻って運動場に行くと、誰か呼ぶ声がある。それは、僕の親父の声なんだ。

牛藤村 3 うしとうそん
銀之助 ぎんのすけ

銀之助 ぎんのすけ
妙なことが有るものだな。

牛藤村 3 うしとうそん
敬之進 けいのしん

敬之進 けいのしん
どんな風に呼びました？

牛藤村 3 うしとうそん
丑松 うしまつ

丑松 3 うしまつ
丑松、丑松とつづけざまに。

牛藤村 3 うしとうそん
敬之進 けいのしん

敬之進 けいのしん
名前を？

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 確かに呼んだんです。親父の声だった。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 お父さんは西乃入の牧場だろう。あんな遠くから、まさか。

牛藤村 3 丑松うう。

丑松 2 また声が！もう一度行つてきます。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 どうも気掛かりだ。我々も行こうか。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 そうですね。

牛藤村 2 丑松は、声のする方を辿って行った。

牛藤村 3 丑松、丑松。
うしまつ うしまつ

丑松 3 おとっさん、おとっさん。

丑松 1 また声が聞える。
こえ きこ

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 おい、大丈夫か？何も聞こえなかったぞ。
だいじょうぶ なに きこ

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 吾輩にも聞こえない。きっと幻聴だよ。
わがはい きこ げんちやう

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 まあ、気にするな。ちよつと疲れているんだよ。
き つか

牛藤村 2 翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。
よくじつ あさ うしまつ ちち し しら でんぽう う

父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。
にし のいり ぼくじやう きしやう あら たねうし お な

牛藤村 1 丑松、隠せ。いかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決つして打明けるな。

牛藤村 2 一時の感情や気の迷いで、この戒を破つたなら、世の中から捨てられたものと思え。

牛藤村 1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

牛藤村 3 丑松。

丑松（全員） おとっさん、おとっさん。

【2】

牛藤村 1 蓮華寺では下宿を兼ねた。丑松が急に引越しを思い立ち、

借りる事にした部屋は、蔵裏の続きにある二階の角のところ。

牛藤村 2 その窓から、飯山の町並みや小学校も見える。夕方近くに丑松は町へ出かけた。

丑松 1 本町の雑誌屋には、新着の書物を筆太に書いて張出してあった。

丑松 2 かねて新聞広告で見て、出版の日を楽しみにしていた「懺悔録」

牛藤村 1 猪子蓮太郎、著。定価も書添えた広告が目につく。

丑松 3 胸が踊るような心地がした。

丑松 1 黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。四十銭を出して買い求めた。

丑松 2 本を抱いて下宿に帰って行く途中、学校の同僚に会った。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 瀬川君、大層遅いじゃないか。

牛藤村 2 銀之助は、丑松から下宿を替えた話を聞いた。

銀之助 君はよく下宿を替える人だねえ。こないだ引越したばかりじゃないか。

牛藤村 1 その時、丑松の持っている本が目についた。

銀之助 「懺悔録」か。相変わらず君は猪子先生のものが好きだな。まあ君は愛読を

通り越して崇拜だ。さぞかしました、この本の事を聞かせられるだろうなあ。

牛藤村2 夕餐の煙は町の空をこめて、同僚の姿も黄昏がれて見えた。

牛藤村3 丑松。

丑松3 僕は、いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、

うろろうして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。

丑松1 僕は、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、

はつきりしない。淋しい顔をしている人が、偉そうに見えて仕方が無い。

丑松2 可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

丑松3 僕は、人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。

実感としては、何もわからない。

丑松1 人を憎むとは、どういう気持ちか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、

何もわからない。僕が実感として、わかる情緒は、可哀想という思いだけだ。

丑松2 この感情かんじょうだけで、生きて来たんだ。

丑松3 僕は、可哀想かわいそうに思われて仕方しかたがないんだ。

丑松（全員）可哀想かわいそうに思われて仕方しかたがないんだ。

牛神うしかみ 過去かこと未来みらいに縛しばられる者は、今いまを感じる事ことが出来できなくなる。

【3】

牛藤村1 丑松は下宿うしまつ げしゆくの畳たたみの上に倒たおれて、身動みうごきもせずかんがに考かんがえていた。

牛藤村2 『懺悔録ざんげろく』は、我われは穢多えたなり、という文句もんくで始はじめてあつた。

牛藤村1 我われは穢多えたなり。同おなじ人間にんげんでありながら、軽蔑けいべつされる道理どうりは無ない。

牛藤村2 過去かこの記憶きおくが丑松うしまつの胸むねの中なかに生いき返かえつた。

牛藤村3 丑松。

丑松1 七ななつ八やっつの頃ころまで、よく他ほかの子こどもに調戲からかわれたり、

丑松2 石いしを投なげられたりした。その恐おそれの情じょうがふたたび起おこって来きた。

丑松3 朦朧おぼろげながら、小諸こもろの向町むかいまちにいた頃ころのことを思い出おもした。

丑松1 『懺悔録ざんげろく』を讀よんで、せつない苦くるしみを感じかんじた。

牛藤村1・2 丑松うしまつもまた。穢多えたなのである。

お志保？ 「破戒はかい」は「穢多えた」という身みぶん分の差別さべつを主題しゅだいとして書かかれた小説しょうせつです。

穢多えたとは、士農工商しろうこうしょうという身みぶん分もとの下もとに位置いちづけられていました。

日本にほんでは古来こらいより「血ち」が穢けがらわしい物ものとされておりましたので、

生き物を屠殺とさつし皮かわを剥はぐ職しよくぎよう業いも忌きらみ嫌きらわれていたのです。

これらの職しよくぎよう業なりわいを生業なりわいとする人々ひとびとが穢多えたと呼ばよばれ、

その身みぶん分だいだいは代々だいだい引き継つがれていったのです。

【4】

牛藤村 1 丑松。

丑松 1 校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。

牛藤村 3 いえ。別に。

丑松 2 実は風間さんが、お願いがあるそうです。

牛藤村 3 私に？何ですか。

牛藤村 1 敬之進。

敬之進 あの、ですね。少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですね。

牛藤村 1 丑松。

丑松 3 そんなに遠慮しないで。

丑松 1 わたし　うかが　かざま　たいしよく　ばあい　おんきゆう　う
私から伺います。風間さんのように退職となった場合には、恩給を受けさせて

いただくわけ　まえ
頂く訳に参りませんものでしょうか。

牛藤村 3 むろん
無論です、そんなことは。小学校令の規則を出して御覧なさい。

丑松 2 きそく　きそく
そりゃあ規則は規則ですけれど。

牛藤村 3 おんきゆう　う　ひと　まんじゆうごかねんいじよう　ざいしよく　かぎ　はなし
恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上、在職したものに限った話です。

かれ　じゆうよんかねん　ろっかげつ
彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。

丑松 3　はんとし
でも、わずか半年のことです。

牛藤村 3　ゆる　さいげん　な　おんきゆう　あきら　ようじよう
それを許したら際限が無い。恩給のことは諦めて養生なさい。

丑松 1　あなた　おねが
どうです、貴方からも御願いしてみても、

牛藤村 1　敬之進。

敬之進　いま　おはなし　うかが　ことば　したが　あきら　ほか　おも
いえ、今の御話を伺えば。お言葉に従って、諦めるより外はないと思います。

牛神 うしかみ
軽蔑 けいべつ。嫉妬 しつと。憎悪 ぞうお。そして、差別 さべつ。人間 にんげんが奥底 おくそこに抱える闇 やみの冷たさ つめを感じる かん。

牛 うし、牛 うし、牛 うし。我 われは、牛神 うしがみなり。

【5】

牛藤村 2 もとより銀之助 ぎんのすけは丑松 うしまつの素性 すじょうを知る筈 はずがない。二人 ふたりは長野 ながのの師範校 しはんこうにいる頃 ころから、

気 きの合 あった友達 ともだちだった。

牛藤村 1 あの頃 ころに比べ くらると丑松 うしまつは変 かわった。以前 いぜんの快活 かいかつさを失 うしなった。

牛藤村 3 銀之助 ぎんのすけ。

銀之助 ぎんのすけ どうにも気掛 きがかりで、蓮華 れんげじ寺 たずに尋ね いて行 いった。苔蒸 こけむした石 いしの階段 かいだんを上 あがり、

落葉 おちばを掃 はいていた寺男 てらおとこに、瀬川 せがわくん君 きみはおりますか。と聞 きく、

寺男 てらおとこは葎裏 くくりの方 ほうへ見 みに行 いった。急 きゅうに声 こえがした。

丑松 1 まあ、あがりたまえ。

銀之助 見ると瀬川君が二階の障子を開けて、顔を出した。私は暗い梯子段をあがった。

牛藤村2 机の上には『懺悔録』

牛藤村3 銀之助。

銀之助 よく君は引越して歩くね。部屋は、前の下宿の方がよさそうじゃないか。

丑松2 こここの、鼠が多いのには驚いた。

牛藤村3 銀之助。

銀之助 鼠？

丑松3 昨夜は枕元にも来たよ。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。

丑松1 猫を飼って鼠を捕らせるより、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。

丑松2 食物さえ宛行つてやれば、そんなに悪さする動物ぢやない。

丑松 3 うちの鼠ねずみは温順おとなしいから御覧ごらんなさいって。そう言いわれて見みると、
少すこしも人ひとを恐おそれない。白昼ひるまですら出でて遊あそんでいる。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 おくさま 奥様ひとという人かわは変ひとった人だね。

丑松 1 ふつう 普通の人ひとより宗しゅうき教的なところがあるのさ。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 ほか 他にはどひとんな人ひとがいるんだ？

丑松 2 こぼうず 子坊主ひとりが一人。下女げじよ。それに庄太しょうたという寺男てらおとこ。

丑松 3 かざま それから、風間かざまさんの娘むすめで、このお寺てらに貰もらわれて来きている、お志保しほさん。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 かざま 風間かざまさんの娘むすめが。

丑松 1 そう。お志保さんは、僕たちの来る前の年に学校を卒業した人だよ。

お志保？ 明治元年。天皇陛下がご誓文を出されて、我が国は近代国家の仲間入りを果たしました。

士農工商の身分制度の廃止。明治四年には解放令によって穢多、非人という身分の区別も廃止されました。我が国は天皇陛下のもと、総ての国民が平等なのです。

と、私は学校で教わりました。でも、本当に平等なんでしょうか？

【6】

牛藤村 1 一膳めし、笹屋。表の障子を開けて入ると、のみくいしている二、三の客。

主婦さんは流許に行ったり、竈の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 主婦さん、何かありますか。

牛藤村 2 川魚の煮いたのに、豆腐の汁ならごわす。

丑松 2 そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 よう、めずらしい御客様が来てますね。

牛藤村 3 丑松。

丑松 3 風間さん、釣りですか。ちったあ釣れましたかね。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 獲物なしさ。朝から寒い思をして、一匹も釣れない。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 とりあえず、一つ差上げましょう。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 君から盃を貰おうとは。道理で今日は釣れない訳だ。

牛藤村 1 身を震わせながら、さも甘そうに地酒を飲む。

敬之進 我輩も学校を辞めてから、これという用が無いもんだから、釣りなどを始めた。

牛藤村 3 丑松。

丑松 2 この雪の中で釣れるんですか。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 素人はこれだから困る。冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。

なに、風さえなけりや、そう思った程でもないよ。しかし、なにが辛いと言ったって、用がなくて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。実は、こないだ、娘に逢いました。

丑松 3 お志保さんに。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進

娘むすめの方ほうから逢あつてくれるという。もつとも、我輩わがはいもね、成なるべく娘むすめには逢あわない

ようにしている。ところが何か相談なん そうだんしたいことがあると言いうもんだから、

久ひさし振ぶりに逢あつてみた。もうどうしても蓮華寺れんげじにはいられない、一日いちにちも早はやく家いえへ

帰かえるようにしてくれ、頼たのむ、と言いう。事情じじょうを聞きいて見みると無む理りもない。その時とき、

我輩わがはいも始はじめてあの住職じゅうしやくの性せい質しつを知しったような訳わけさ。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1

性せい質しつと言いうと？

牛藤村 3 敬之進。

敬之進

よく世間せけんには立派りっぱな人物じんぶつだと言いわれていながら、女おんなというものにかけて、非常ひじょうに弱よわい男おとこがあるものだね。蓮華寺れんげじの住職じゅうしやくもやはりそうだろうと思うよ。娘むすめはもう

悲かなしいやら恐おそろしいやらで、夜よるも寝ねられないと言いう。一日いちにちも早く引取ひきとりたいが、また

娘むすめが飛込とびこんで来て見給みたまえ。八人はちにんの親子おやこがどうして食くえよう。娘むすめに帰かえれとは言いわれ

ない。先方せんぼうが親おやらしい行こうい為いをしななまでも、これまで育そだてて貰もらった恩義おんぎも有ある。

一旦いったん、蓮華寺れんげじの娘むすめと成なった以上いじょうは、どんな辛つらいことがあろうと決けつして家いえへ帰かえるな。

そこを勤つとめ抜ぬくのが孝行こうこうというものだ。とまあ、無理むりやり娘むすめを追立おいたてたよ。

牛藤村 3

丑松。

丑松 2
知しりませんでした、お志保しほさんがそんな辛つらい思おもいをしていたなんて。

牛藤村 3

敬之進。

敬之進
吾輩わがはいは情なさけない父親ちちおやだよ。

牛藤村 2 この大雪を衝いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、

という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。

牛藤村 1 その日は宿直の当番として、丑松と銀之助は学校に居残ることに成った。

牛藤村 2 もっとも銀之助は用事が有ると出て行って、日暮になっても帰って来なかった。

牛藤村 1 蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、

牛藤村 2 ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくお志保の身も案じられる。

牛藤村 1 さまざまな想像に耽りながら、悄然とランプの火を見つめて居るうちに

牛藤村 1・2 お志保が入って来た。

丑松 3 お志保さん。

丑松 1 どうしてこんなところに。

牛藤村 3 お志保。

お志保 何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の一つも懸けてくれないの。何故、口唇は言いたいことも言わないで、堅く閉じ、塞がって恐れと苦しみとで震えているの。今の私を見て。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 見給え、君があまり沈んでいるから、だから君は誤解されるんだ。

丑松 2 誤解されるとは？

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 君を穢多だなんて、実に途方もないことを言う人もいる。

丑松 3 誰がそんな事を？

牛藤村 3 銀之助。

銀之助

僕は青年時代の悲しみということを考えて、いつも君の為に泣きたくなる。

実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。

君から切出してくれると、およばずながら出来るだけのことは尽すよ。

牛藤村 1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。

これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

丑松 (全員) おとっさん、おとっさん。

牛藤村 3 丑松は自らの叫び声で、夢から目を覚ましたのである。

牛神 迷いと葛藤の中に、別れと苦しみの懐古園。

黄金の寅が、独り侘しく草笛を聴く。

嗚呼、桜の花よ。

牛藤村 1 月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。

牛藤村 2 応接室の側の一間を自分の部屋と定め、毎朝授業の始まる前には、

牛藤村 1 そこに閉籠るのが癖。

牛藤村 2 それは事務の支度をする為でもあったが、また一つには職員達の不平と、

煙草の臭気を避ける為でもあった。

牛藤村 1 戸を叩くものがある。

牛藤村 2 その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。

牛藤村 1 校長はこうして、お気に入りの教員から報告を聞くのである。

牛藤村 2 いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。校長。

牛藤村 3 勝野君。君は、妙なことを言ったね。どうも君の話は要領をえず、解りにくい。

牛藤村 1 勝野文平。
かつのぶんべい

牛藤村 3 一生の名誉めいよに関かかわることを、迂濶うかつにはしやべれないじや有ありませんか。まあ、事じじつ実じつだとしたら

瀬川君は学校せがわくん がっこうにいられなくなるでしょう。

牛藤村 2 校長。

牛藤村 3 誰だれから彼かれのことを聞きいたのかね。

牛藤村 1 勝野文平。
かつのぶんべい

牛藤村 3 妙みょうな人ひとから聞ききました。まあ代議士だいきしにでも成なろうという位ぐらいの人物じんぶつですから、

無責任むせきにんなことを言いう筈はずも有ありません。

牛藤村 2 校長。

牛藤村 3 代議士だいきしにでも？高柳利三郎たかやなぎりさぶろうか。益々ますます、気きになる。はつきり言いいたまえ。

牛藤村 1 勝野文平。
かつのぶんべい

牛藤村3 わかりました。ちよつとお耳みみを拝借はいしゃく。ヒソヒソヒソ。

牛藤村2 校長。

牛藤村3 まさか！瀬川君せがわくんが穢多えただとは、夢ゆめにも思おもわなかつた。

お志保？ 明治三十二年。島崎藤村は小諸義塾の英語教師として小諸こもろに赴任ふにんし、六年間暮らくねんかんくらしました。

結婚けっこんして、子こも授さずかります。この頃ころからそれまでの詩作しさくから散文さんぶんへと転回てんかいしていきます。

そして、小諸こもろや千曲川ちくまがわ一帯いちたいを描写びやうしやした「千曲川ちくまがわのスケッチ」を書かきました。

島崎藤村しまざきとうそんが「破戒はかい」を書かき始めたのもこの頃ころからです。

藤村とうそんは小諸こもろで何なにを感じかんじて「破戒はかい」を書かき始めたのでしょうか？

牛神うしがみ 町まちの田たが戸惑とまどいつつ現あらわれた朝あさ。藤ふじの澤さわは酒さけに、吞のまるる。

我われ。迷まよいの中に、揺蕩たゆたう。知しらぬ間まに蔵くらへ入はいらん。

丑松 1 とある店の横手に、貼付けてある広告が目についた。

丑松 2 見ると政見を発表する会で、猪子先生の名前も一緒に書き並べてあった。

丑松 3 会場は法福寺、その日の午後六時から開会するとある。

丑松 1 日暮れを待って、人知れず猪子先生に逢いに行こう。

牛藤村 2 こう考えて、蓮華寺に戻り部屋に居ると、奥様が入って来た。

牛藤村 1 こんなことになりやしないか、と思って私も心配していたんです。

牛藤村 2 と前置をして、奥様は昨夜の出来事を話した。

丑松 2 日暮れ頃、お志保さんは郵便を出すと言って出たつきり、帰って来ないとのこと。

丑松 3 箆笥の上に置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので。

丑松 1 その中には、自分一人の為に様々な迷惑を掛けるようでは、

義理ある両親に申訳が無い。などと書いてあった。

牛藤村 1 奥様。心配で眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。父親さんの方へ

帰って居るらしい。和尚さんだって眼が覚めましたろうよ、今度という今度は。

牛藤村 2 奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。

丑松 2 釣りとは昼寝と酒より外には働く気のない父親。

丑松 3 あの家へ帰ったとしても、果してこれから、お志保さんはどうなるだろう。

丑松 1 言うに言われぬ悲しい心地になった。

牛藤村 1 急に丑松は壁を離れた。廊下を通り抜け、蓮華寺の門を出た。

丑松 2 猪子先生の事を考えながら、千曲川の畔へ出た。先生に自分のことを話そう。

丑松 3 煙る夜の空気を浴び、やって来る人影を認めた。演説会が終ったところだ。

丑松 1 皆、激昂したり、憤慨したりして、聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。

丑松 2 猪子先生の演説は深い感動を町の人々に伝えたい。

牛藤村 2 宿に行つて逢おう。こう考えて歩いた。表に立つて覗いて見ると、取込んだこと

でも有るのか人々が出入して居る。亭主であろう男を呼留めて、

蓮太郎のことを尋ねた。すると亭主の口から意外な報知を聴いた。

丑松 3 法福寺の門前で猪子先生が襲われた。

牛藤村 1 丑松は亭主の後について法福寺へと急いだ。

牛藤村 2 丑松が駈付けた時は、間に合わなかった。聞いて見ると、蓮太郎は石か何かで

烈しく殴られた。何の抵抗も出来なかったらしい。血が雪の上を流れていた。

牛藤村 1 思わず蓮太郎の耳へ口を寄せた。

牛藤村 2 蓮太郎の蒼ざめた頬へ自分の頬を押し宛てて、呼んで見ても、

牛藤村 1 月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。

丑松 1 先生、先生。

牛藤村 2 そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。

牛藤村 1 戸板に載せ、上から外套を懸けて、宿に向けて出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。

丑松 2 さくさくと音のする雪を踏んで、猪子先生の一生を考えながらついて行った。

丑松 3 我は穢多を恥とせず。その言葉が心に浮かんだ。

牛藤村 2 自分は隠蔽そうとして、その為に一時も自分を忘れることが出来なかった。

自分で自分を欺いて居た。何を思い、何を煩う。

丑松 (全員) 我は穢多なり。

丑松 1 明日、学校へ行って打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。

牛藤村 1 丑松は新しい暁の近づいたことを知った。

牛藤村3

学校へ行く支度をする為、丑松は朝早く蓮華寺へ戻った。朝飯の後、机に向って進退伺を書いた。冬の朝日が射す障子を開けて、雪に包まれた町々を眺める。

家と家との間からは小学校の建物も、朝日をうけた。しばらく眺め入って居たが、胸に浮んだのは『懺悔録』第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更

のように新しく感じて、告白するように繰返した。我は穢多なり。我は穢多なり。蓮華寺の山門を出て、とある町の角で、向こうから巡査に引かれて来る男に出逢った。

黒の紋付羽織、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、

高柳利三郎と知れた。町の人々は猪子蓮太郎を襲った犯人だと囁き合っている。

学校の運動場には雪が積上げてあった。

丑松2

玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。

丑松 3 授業が始まるまで、あちこちと廻って歩くと、大鈴の音が響き渡った。

丑松 1 湧上る胸の想いを制えながら、三時間目の習字を教えた。

丑松 2 午後の課目は地理と国語だった。

丑松 3 五時間目には、国語の教科書の他に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを

一緒に持って教室へ入った。

丑松 1 教科書に取掛り、やがていつもの半分ばかり講釈したところで本を閉じた。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 1 皆さんに少し話す事があります。

丑松 2 と言って生徒たちを眺め渡す。

丑松 3 私は皆さんに、別れを告げなければなりません。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 1 皆みなさんも御存ごぞんじでしょう。

丑松 2 この山国やまぐにに住む人々す ひとびとを分けて見ると、おおよそ五通りごとおりに別れて居います。

丑松 3 それは旧士族きゅうしぞくと、町の商人まち しょうにんと、お百姓ひやくしやうと、僧侶ぼうしん、それからまだ外ほかに

丑松 1 穢多えたという階級かいきゅうがあります。

丑松 2 もしその穢多えたがこの教室きやうしつにやって来て、皆みなさんに国語や地理を教おしえるとしまし

たら、皆みなさんはどう思おもいますか、皆みなさんの父親おとつさんや母親おつかさんは、

どう思おもいましょうか。実じつは、私わたしはその卑賤いやしい穢多えたの一人ひとりです。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 3 どうぞ私わたしの言いうこと、よく覚おぼえて置おいて下ください。これから五年十年いねんじゅうねんと経たって、

皆みなさんが小學校時代しょうがっこうじだいのことを考かんがえる時ときに。あの教室きやうしつで、先生せんせいに習ならったことが

有あったつけ。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 1 あえの穢多きよういんの教員すじようが素性うちあを告白わかけて、別れのを述べた事ことを思い出おもして頂ただきたいのです。

私は卑賤いしい生れうまでも、皆みなさんが立派りっぱな考かんえを御持おもちなさるように、
それを心掛こころがけて教おしえた積つもりです。

牛藤村 3 丑松。

丑松 2 皆みなさんが御家おうちへ御歸おかえりに成なりましたら、どうぞ父親おとつさんや母親おつかさんに
私わたしのことを話はなして下ください。今いままで隠蔽かくして居いたのは全まったくすまなかつた、

と言いって、皆みなさんに告白うちあけたと話はなして下ください。

丑松 (全員) 私わたしは穢多えです。

丑松 3 不浄ふじような人間にんげんです。

丑松 1 許ゆるして下ください。

牛藤村 2
教室きょうしつに居いる生徒せいとは総立そうだちに成なった。その時とき、大鈴おおすずの音おとが響ひびき渡わたった。

教室きょうしつの戸とが開あいた。他ほかの組ぐみの生徒せいとも教師きょうしも出でて来きた。

牛藤村 1
銀之助ぎんのすけは職員室しょくいんしつで、丑松うしまつのことを耳みみに入いれ職員室しょくいんしつを飛出とびだした。

銀之助
玄関げんかんを横切よこぎって、左右さゆうに馳違はせちがう生徒せいとの群むれを分わけて、高等四年こうとうよんねんの教室きょうしつに行いってみると、

廊下ろうかのところに校長こうちやう、教師きょうし五六人ごろうくにん、中なかに文平ぶんぺいも、その他たこうとうか高等科せいとの生徒せいとが

瀬川君せがわくんをとりまいて居いた。君きみ、大丈夫だいじやうぶか？と話はなしかけると、

瀬川君せがわくんは懐ふところから進退しんたい伺うかがいを取り出だして、こう言いった。

丑松うしまつ
(全員ぜんいん) 許ゆるしてくれ給たまえ。私わたしは穢多えたです。

銀之助
君きみの決意けついはわかった。ここは任まかせて、帰かえりたまえ。

牛藤村 3
丑松うしまつは、銀之助ぎんのすけに促うながされ学校がっこうを出でて行いったのである。

お志保？ 明治三十八年の四月。島崎藤村は、仕上げのすんでいない「破戒」の草稿を携え、

幼い娘達や妻と共に、東京へ引っ越しました。上京間もない五月に、三女がハシカから

急性脳膜炎をわずらい亡くなります。「破戒」が完成し、自費出版されたのは

明治三十九年三月でした。直後の四月に次女が急性腸カタルで、六月には長女が三女と

同じ経緯で亡くなります。「破戒」完成の前後、藤村は相次いで娘達を失います。

父親としての藤村は、どんな想いを抱えていたのでしょうか？

牛神 浅間から吹き抜ける風に、黄金の稲穂が騒めく。

明かり染める谷に、武者が一瞬を捉える。

鈴の木は、ここに祈りを捧げ、総てを潤す石の井戸が、

黒き岩を噴き上げる力の源なり。

牛、牛、牛。我は、牛神なり。

【11】

銀之助

瀬川君はきつと、お志保さんの所に行くはずだ。

牛藤村 1

銀之助は敬之進の住居を訪れた。

牛藤村 2

友達思いの彼は心配しながら、丑松を追って来たのであった。

牛藤村 3

銀之助。

銀之助

一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたか。

牛藤村 3

お志保。

お志保

さつき御帰りに成ました。

銀之助

さつき？

お志保

瀬川さんは御気の毒な様子でした。私は穢多です、許してくださいと言って、

出て行ってしまわれました。

銀之助 あなたも驚いたでしよう。

お志保 いいえ、前に文平さんから聞きましたから。

銀之助 勝野君から？

お志保 瀬川さんのことを、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、気の毒でなりません。

銀之助 ほんとに？僕は、瀬川君を貴方に助けて頂きたいと思っていますのです。

お志保 私に？

銀之助 ええ。瀬川君は貴方のことを大切に思っています。自分の素性を考え及ばない希望と。

それで貴方に、今まで隠していた素性を告白したのです。瀬川君の真情が解りましたら、

助けてやろうという考えを、持って下さることは出来ませいか。

お志保 もう私は、その積もりです。

銀之助 まだ近くにいる筈だ、一緒に探しましょう。

【12】

牛藤村1 丑松は、

牛藤村2 雪の中を

牛藤村1 千曲川に向かって、

牛藤村2 歩いていった。

牛藤村3 丑松。

丑松1 おとっさん。

丑松2 私は戒めを、

丑松3 破りました。

牛藤村1 隠せ。いかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決つて打明けるな、

牛藤村2 一時の感情や気の迷いで、この戒を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 わたし 私は、世よの中から捨すてられる。

丑松 2 い 生きるのが、怖こわい。

丑松 3 よ 世なかの中こわが、怖こわい。

丑松 1 にんげん 人間こわが、怖こわい。

丑松 2 なが 流ちれる血こわが、怖こわい。

牛藤村 3 丑松。

丑松 3 わたし 私ころは殺ころされるのですか？

丑松 1 ころ なぜ、殺ころされるのです？

丑松 2 にんげん 人間にんげんではないからですか？

丑松 3 にんげん 人間なんとは、何なんですか？

丑松 1 死ぬと、どうなるのです？

牛藤村 3 丑松。

丑松 2 おとっさん、答えて下さい。

丑松 3 おとっさん、寒い。

丑松 1 独りは、寒いです。

丑松 2 死んでも独りですか？

丑松 3 私は、ここで

丑松 (全員) 死ぬのですね。

牛神 命は、この瞬間に生きている。

牛藤村 1・2 この瞬間の命こそが、

牛神 無限の可能性を秘めている。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 瀬川君！
せがわくん

牛藤村 3 お志保。

お志保 無事ふじでよかった。

銀之助 助けたすに来きたよ。

丑松 1 助けたすに？

お志保 貴方あなたは、もう独ひとりじゃありません。

丑松 2 独ひとりじゃない？

お志保 そうですよ。

銀之助 僕ぼくたちは、仲間なかまじゃないか。

丑松 3 ありがとう。

牛神 うしがみ
運命の流れに運ばれる命。 うんめい　なが　はこ　いのち

時間と言う支流が出会い、重なり合って、
じかん　い　しりゅう　であい　かさ　あ

やがて時代という大きな流れを形成していく。
じだい　おお　なが　けいせい

命は、川の流れの様に出会いを重ねる事で、深みを増していく。
いのち　かわ　なが　よう　であ　かさ　こと　ふか　ま

頼もしきかな命。牛、牛、牛。我は、牛神なり。
たの　いのち　うし　うし　うし　われ　うしがみ

命を見つめる者なり。
いのち　み　もの

【13】

牛藤村 1
これは過去の物語である。
かこ　ものがたり

牛藤村 2
過去には後の時代に取り、反省すべき事柄も多い。
かこ　のち　じだい　と　はんせい　ことがら　おほ

牛藤村 1
過去こそ、真実であるからであろう。
かこ　しんじつ

牛藤村 2
真実とは何か、考え続ける事が、新たな未来を開くだろう。
しんじつ　なに　かんが　つづ　こと　あら　みらい　ひら

牛藤村3　そして瀬川丑松は、仲間達の助けを借り、新たな広い世界へ、踏み出していったのである。

お志保？　瀬川さんや銀之助さんとの出会いが、私の生き方を変えました。

今、この瞬間を大切にして、私は生きています。

牛神　島崎藤村「破戒」。本日は、これにて終演といたします。